



学校だより

はと広場

6月号

平成30年6月1日

さいたま市立北浦和小学校

TEL 048-831-2463

聴き上手

校長 益子 聡

- ❖ いいです。他にもあります。
- ❖ Aさんの考えもいいし、Bさんの考えもその通りだと思います。
- ❖ Cさんの考えはよくわかります。～とかを付けたすともっとわかりやすくなると思います。

毎日の授業や集団の活動の中で話し合いをしたり感想を発表したりしているとき、子どもがこのような発言をしている場面をよく見ます。北浦和小の子どもたちは、正しいか、正しくないか？ 好きか、嫌いかなど、YESとNOだけではなく、二つの選択肢を含めた上で〈第三の意見〉をもっているということの表れだと思います。「どちらでもない」「どちらでもいい」ではなく「どちらもいい」という意見です。まさに、日本人の美德の一つである〈和の心の答え〉です。

◆ 歴史に名を残した偉人の 聴くこと

会話の中で「どちらもいい」と答えるためには、相手の話をしっかりと聴く必要があります。

相手の話をしっかりと聴くことについて、日本の教育界に多大な足跡を残した教育者・森信三氏の著書『修身教授録』の中に〈対話の心得〉という話があります。そこには

- ・対話の第一の心得は、なるべく相手に話をさせ、自分は〈聞き役に回る〉こと
- ・数人で話をする場合には、一人が話し始めたら他の人はその人の話に耳を傾け、決して自分のそばにいる人とコソコソと話などしない。そして、全員が一度は話ができるように心配りをする

などの心得が記述されています。

〈聞き役に回る〉と言っても、ずっと聞き役に回っていたら相手だけが一方的に喋りっぱなしになってしまいます。あるいは、どちらかが喋ったらよいのかためらってしまいます。〈聞く〉という言葉には「音や声を耳で感じ取る」という意味のほかに「質問する／尋ねる」という意味もあります。つまり〈聞き役に回る〉ということは、相手に興味・関心をもって質問し応えてもらうということもあるのです。相手も、自分に興味・関心をもってくれるとうれしいし、自分から話ができることで二重の快感もあります。それを交互に行えば、本当の意味での対話になります。

◆ 子育ての中での 聴くこと

本校の子どもたちは、先生の話や友だちの話・発表の場面などで、本当に話をよく聴いています。前述の〈対話の心得〉に照らしてみると、聞き役に回る姿勢が自然にできているということを感じます。これは①日頃から家庭で「先生や友だちの話を最後までしっかりと聞くようにしましょうね」と子どもに言葉がけをしてくださっているということ。同時に②家族が子どもの話を最後までじっくり聴いてあげているということのよい結果の現れであると思います。

〈子育ての基本＝躰〉ということもありますが、もう一つ大切なことは、子どもの話に耳を傾けてあげることです。親に自分の話をじっくり聴いてもらっている子どもは、先生や友だちの話もしっかり聴くことができるのです。

大人が子どもの話を聴くときのポイントには

- ③子どもの目を見て、大きくゆっくりうなずいて最後まで話を聴いてあげる
- ④子どもの話す言葉の一部をそのまま繰り返し（復唱し）、理解しているよというサインを出してあげる
- ⑤子どもの立場になって共感し「なるほど」「へー」「すごいね」など、バリエーション豊かに相づちを打ちながら聴く

などもあります。

大人が子どもの話の〈聴き上手〉になることで、子どもも〈聴き上手な子ども〉に成長していきます。そのことが、自分の考えや意見をしっかりともち質の高い質問ができる子ども、さらには人間関係がスムーズにいく子どもを育てることにつながっていくのです。